



パパとママと いっしょに よむ こども せいしょ どうわ

マラキ

書いた人 マラキ預言者
マラキの意味 主の使い

核心聖句

しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には、いやしがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにね回る。
(マラキ 4:2)

パパとママとまず理解するマラキ書

マラキは、「主の使い」という意味です。
イスラエルの民は、バビロンの捕虜として連れて行かれたのですが、もう一度、彼らの地に戻ります。神様は、ハガイ、ゼカリヤ預言者を通して、神殿を建てなさいと言われました。そして、崩れた神殿の再建が完成されました。
その後、エズラを通して礼拝とみことばが回復して、ネヘミヤが改革運動を主導して、城壁が再建されます。しかし、ネヘミヤが強大国ペルシヤを助けるために帰った後に、イスラエルの民はまた腐敗するようになりました。マラキが記録された時期は、エズラとネヘミヤが活動していた時期と似ています。そのときは、ペルシヤという強大国の植民地であり、日照りと病虫の害が続いて、田畑とぶどう園がひどく荒れ果ててしまいました。そして、メシヤがすぐに臨むと信じていたのに、バビロンの捕虜から帰ってきて百年が過ぎたのに、臨まれることなく、多くの不信仰が生まれました。祭司は神殿のいけにえで自分たちのお腹を満たして、病気のいけにえを神様に捧げていました。そして、神殿は、いろいろな罪悪でいっぱいになっていました。ですから、民たちは、祭司に不満を持って、十分の一をいかげんにしました。そのとき、マラキ預言者を通して神様がみことばをくださったのです。変わらずに神の子どもを愛してください。みことばをくださり、祭司とイスラエルの民の腐敗を警告して、まことの神殿の主人公であるメシヤが乗られる日を、もう一度、約束してください。
人間中心的な生き方から抜け出して、神殿の主人公であるイエス・キリスト中心の生活の方法をレムナントといっしょに話してみてください。

バビロンの くにが イスラエルに せめこんできました。
そのとき しんでんは くずれてしまいました。
そして イスラエルの たみは ほりよとして つれていかれたのです。
そのような あるひ かみさまは イスラエルの たみを もういちど
かえって くるように してくださいました。
たみは はたけを つくって いえを たてて いそがしくしました。

しかし、かみさまは しんでんを もういちど たてなさいと
いわれました。 しんでんの しゅじんこうである キリストの
けいやくを おぼえさせようと されたのです。
ハガイ、ゼカリヤ よげんしゃが かみさまの みことばを つたえて
しんでんは かんせいしました。

じかんが たって いつのまにか
やく100ねんが すぎさりました。
イスラエルの たみは かわらずに
しんでんの しゅじんこうを
おぼえていたでしょうか。

キラキラ たいようの ひかりが てらす ひでした。
ぶどうが むらさきいろに じゅくして いていました。

「うえーん!うえーん!」

きゆうに いなごが むれに なって
ぶどうの はたけを すべて おおいました。
のうふが あせを いっぱい ながして
いなごの むれを おいはらいました。
しかし いなごの むれは
ぶどうより もっと おおかったのです。
のうふは いなごが たべてしまった
ぶどうを みて
なみだが ながれました。

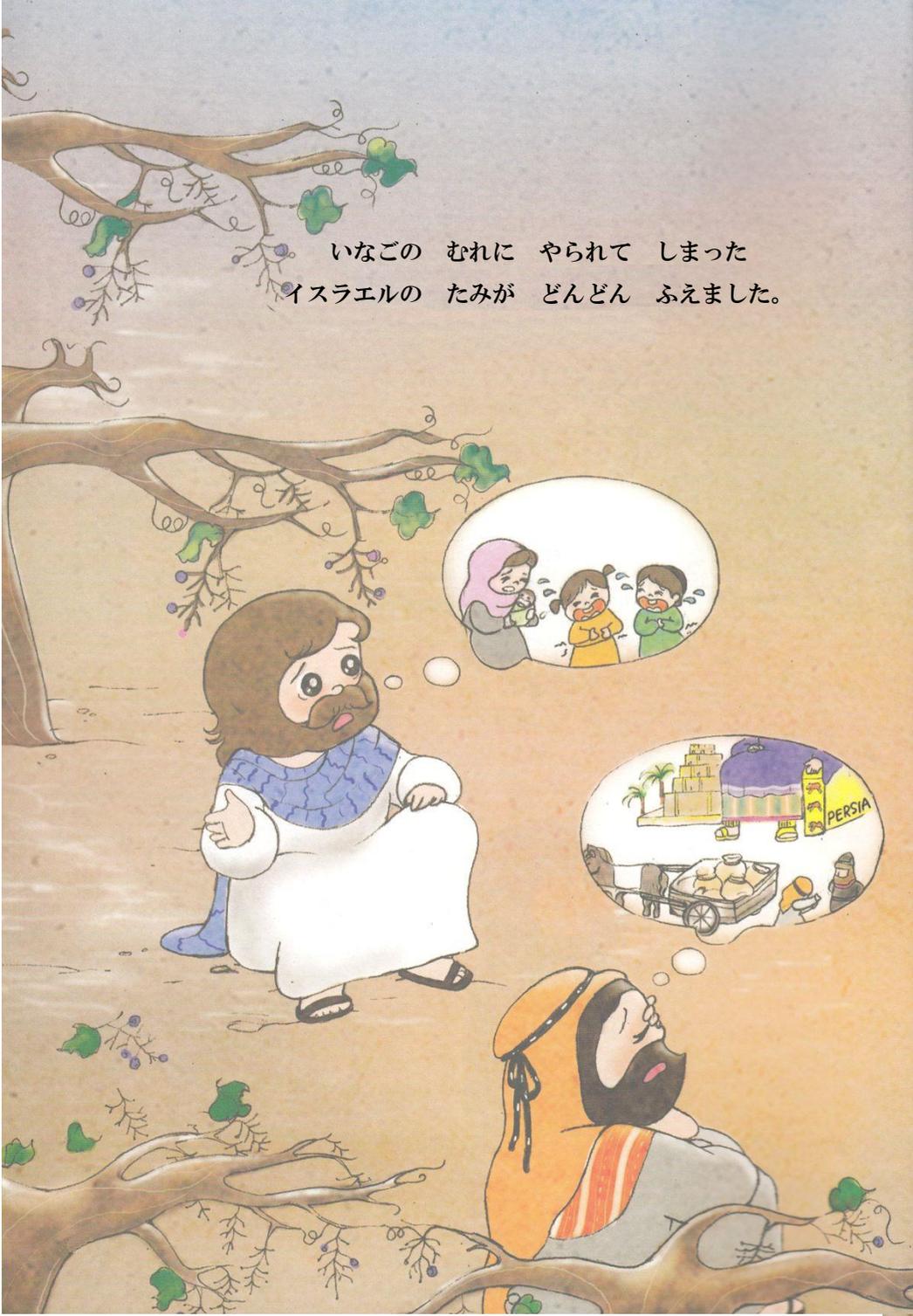
「ああ! こんなことが!

きょねんは あめが ふらなくて ぶどうの のうさぎょうが
できなかったのに…

ことしは いなごの むれが ぶどうを みんな たべてしまった!

いったい かみさまは わたしたちの みんなを
あいして おられるはずなのに なぜ こうされるのか…」





いなごの むれに やられて しまった
イスラエルの たみが どんどん ふえました。



「ほんとうに ぶどうの のうさぎょうが だめになって
たべて せいかつすることが しんばいだ」
ひとりの のうふが なんにんかの こどもを おもいだして いいました。

「そうだ。ペルシヤの くにに ぜいきんも ださないと いけないし…」
イスラエルは ペルシヤの くにに おかねを ささげなければ
なりません。そして ちいさな ことも ペルシヤの
くにに きよかを してもらわないと いけなかったのです。

「だんだん じゅうぶんの いちを だすことも たいへんになる…」
もうひとりの のうふが くさった ぶどうを つかんで
なみだを ながしながら いいました。

イスラエルの たみが しんでんに
とほとほと
ちからなく あるいて きました。



ひとりが ぼつちりと ふとった ひつびきの ひつじを
さいしに だしました。

「じゅうぶんの いちです。 かみさまに ささげるので
さいこうの ひつじを つれてきました」

さいしは ひつじを うけとりながら かんがえました。

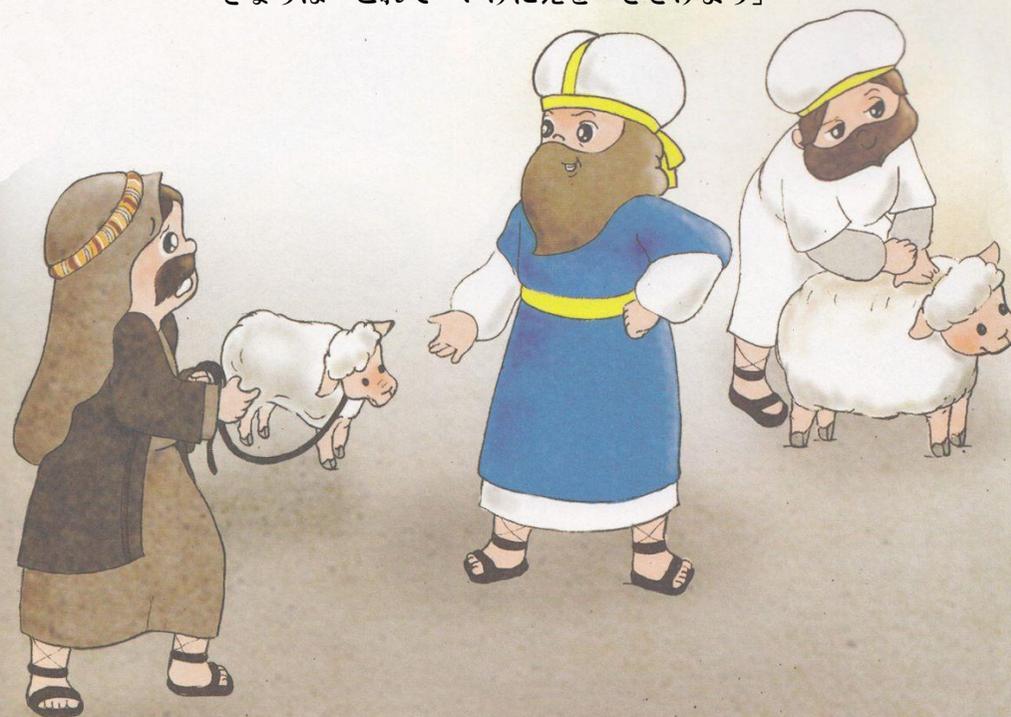
「とつても ぼつちりした ひつじだな。べつに とっておくべきだな」

ほかの ひとりが がりがりに やせた ひつじを
さいしに だしました。

「ことしは のうさぎょうが だめだったのを ごそんじでしょう。
これも やっと みつけた ものです。 かみさまは ごそんじでしょう」

さいしは がりがりに やせた ひつじを うけとりながら
かんがえました。

「これは ほんとうに ひよろひよろだな。
きょうは これで いけにえを ささげよう」



イスラエルの たみは ひとり ふたり あつまると
くちを とがらせて もんくを いいました。

「このまえ さいしの いえの にわに ぼっちゃりした ひつじが
つないであったよ。 わたしが どんなに よいものを
かみさまに ささげても けっきょく さいしたちが みんな
もっていってしまう みたいだ」

「きみは しらないのか。 わたしは だから いつも
ひよろひよろの やつを ささげるんだ。
じぶんたちが たべるだけでも たいへんなのに
じゅうぶんのいちを だしたら くるしいだろう。
それでも しなけりゃ ならないのか」

「しんでん けんちくを して 100ねんも すぎたのに
メシヤは いつ くるんだろう。
なぜ わたしたちの みんなぞくだけ いつも
くるしい ことが おきるんだ」

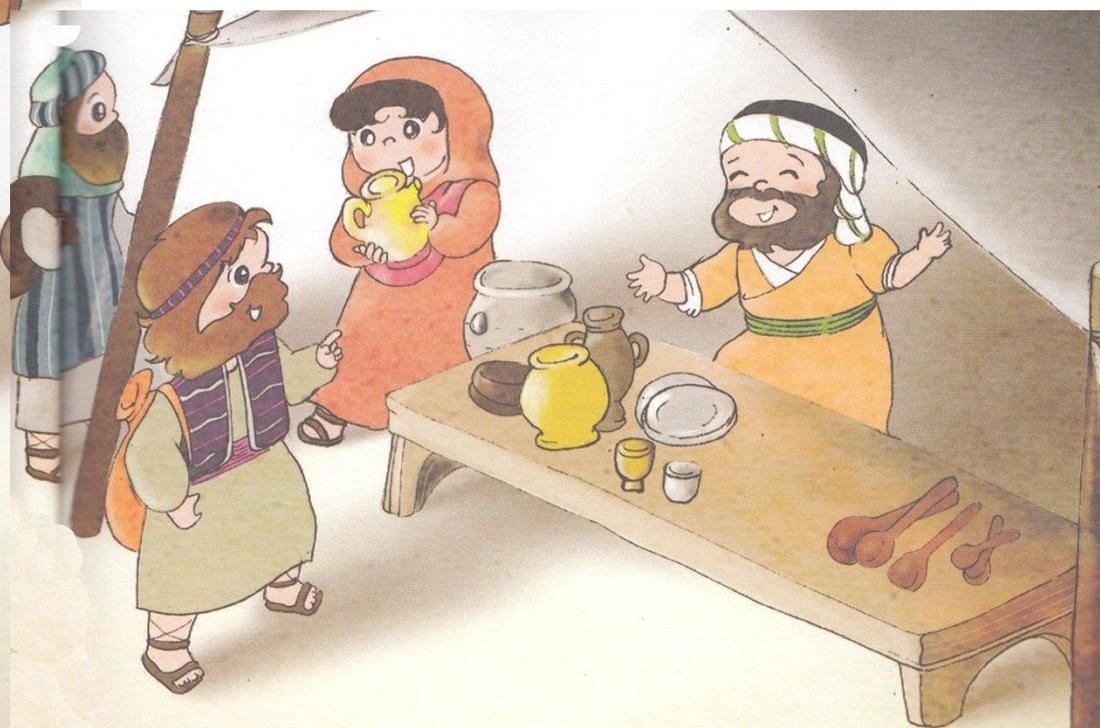




イスラエルの たみは
いつも している とおりに しんでんで れいはいを ささげました。

しかし しんでんの しゅじこうを まったく わすれて いました。
かみさまに いけにえを ささげる さいしも おなじでした。
かれらの ころには たべること きること いっぱいでした。
かれらの ころには かみさまの くださった けいやくが
ありませんでした。

かみさまは いかりを おぼえられました。
しかし かみさまの たみに むかった あいは
もっと おおきかったのです。



かみさまは マラキよげんしゃに
みことばを くださいました。





マラキよげんしゃは
イスラエルの たみに かみさまの みことばを
つたえました。

「わたしは あなたがたを あいしている。
しかし あなたがたは どのように
わたしたちを あいしておられるのかと
いっている」



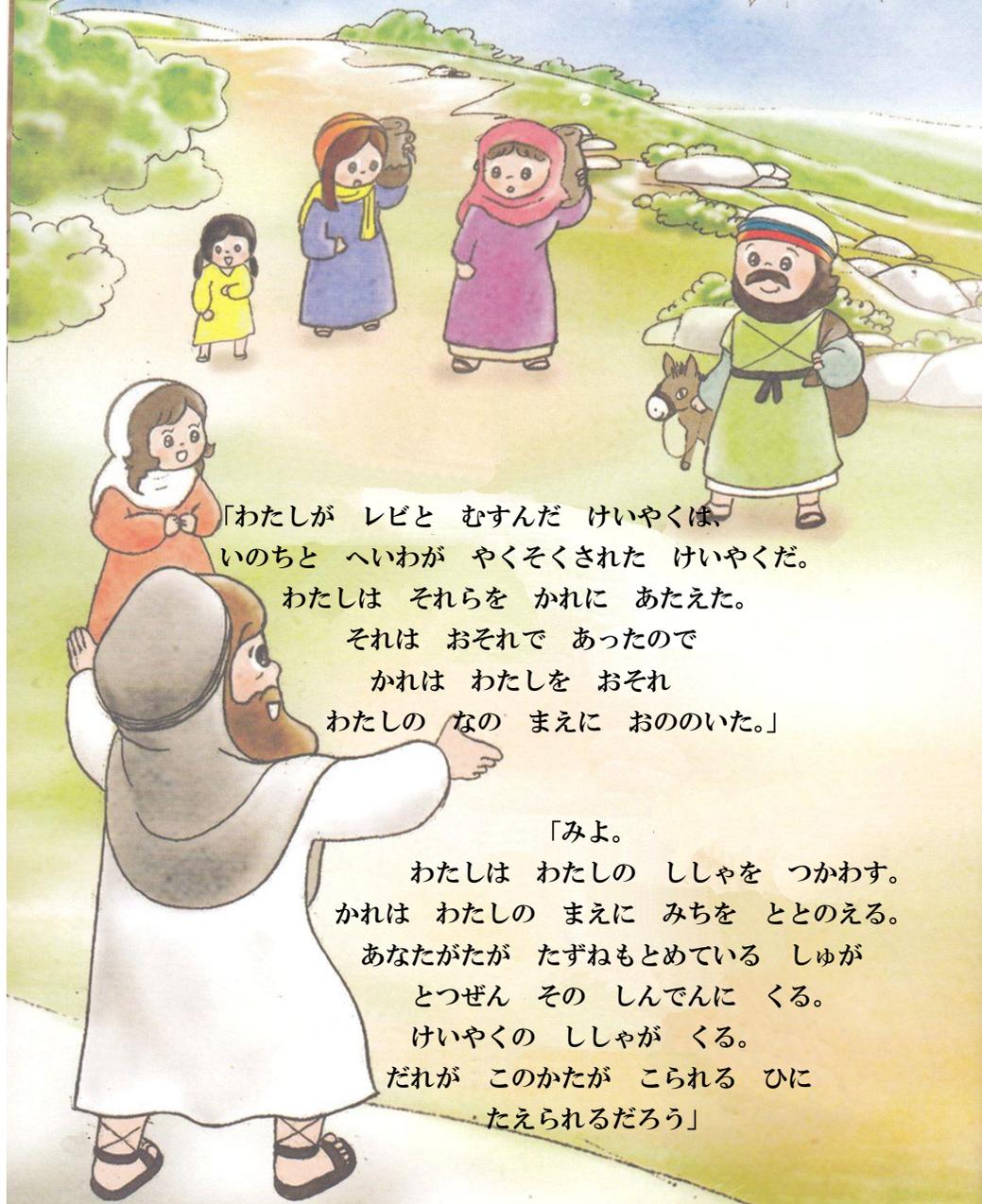
そして さいしに むかった かみさまの けいこくを つたえました。

「あなたがたは わたしの さいだんの うえに けがれた パンを
ささげて 『どのようにして、わたしたちが あなたを
けがりましたか』と いう。あしのなえた ものや びょうきの ものを
ささげるのは わるいことでは ないか。

わたしは あなたがたを よろこばず
あなたがたの てで ささげた ことを うけとらない。
あなたがたが わたしの ことばを ころに おかないなら
わたしは のろいを くだす」



イスラエルの たみが わすれて しまった
しんでんの しゅじんこうである キリストの けいやくを
もういちど かくにんさせて くださいました。



「わたしが レビと むすんだ けいやくは、
いのちと へいわが やくそくされた けいやくだ。
わたしは それらを かれに あたえた。
それは おそれであつたので
かれは わたしをおそれ
わたしの なの まえに おののいた。」

「みよ。
わたしは わたしの ししやをつかわす。
かれは わたしの まえに みちをととのえる。
あなたがたが たずねもとめている しゅが
とつぜん その しんでんに くる。
けいやくの ししやが くる。
だれが このかたが こられる ひに
たえられるだろう」

かみさまが マラキよげんしゃを とおして
みことばを くださって やく400ねんが ながれました。
イスラエルに けいやくが ぼんやりと なっていた
そのころ ある しずかな よるでした。
うまごやの かいばおけの なかで
あかんぼうが「おぎゃーおぎゃー」となっていました。
それが しんでんの しゅじんこうである キリスト
イエスさまだったのです。

